

学級通信ノートで国語力を高める。

齊藤 振一郎（札幌市立元町北小学校 教諭）

国語力…中でも、作文を書く力を高める指導法の1つとして視写や聴写がある。手本を視写や聴写させる事で、作文の基本的な型を身につけさせる…いわゆる「型を教える」指導だ。

この「型を教える」指導は単発で行うより、可能なら継続して取り組んだ方が効果が上がる。そこで継続して行うため、学級通信を板書して子供たちに視聴写させる…それが「学級通信ノート」である。

原実践は、社会科の授業名人として知られていた故・有田和正先生だ。幾つかの著作で主張されているのだが、概ね次の様な主張がなされている。

学級通信を毎日発行している教師がいて、それ自体は価値のある行為だ。
しかし、それを発行する事で力が高まるのは教師自身であり子供ではない。
どうせなら、学級通信を発行する事で子供の力が高まるようにしたい。
そこで、学級通信を教師が発行するのではなく、子供たち自身に書かせるようにしてはいかがだろうか。

この主張を最初に読んだのは10年以上前で、それ以降、ほとんど毎年「学級通信ノート」として取り組んできた。途中、通常の学級通信発行に戻した事もあるのだが、その年度は子供たちの国語力向上に不満が残る結果となった。そのため、最近は「学級通信ノート」の実践を続けている。

では、どの様な国語の力が「学級通信ノート」で高まるのだろうか？

これまでの実践から、以下の点が向上すると私は感じている。もちろん、子供たちには個人差があるので、全ての子供が等しく以下全てを達成できるという訳ではない。

1. 文を書く事に対する抵抗感が減る。
2. 文字を書き写す速度が速くなる。
3. 自分の考えた事や感じた事を文にする事ができるようになる。
4. 「は」「を」「へ」や句読点の使い方が身につく。
5. 様々な表現方法が身につく。
6. 話を正しく聞く事ができるようになる。
7. ノートなどをレイアウトする事ができるようになる。

この内の1と2は、小学校の学習指導要領には含まれない内容だろう。強いて言えば、子供の指導要録を書く際、「関心・意欲・態度」として記入される部分と言えようか。

だが、3と5と7は「B 書くこと」の内容であり、4は「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」、6は「A 話すこと・聞くこと」の内容である。つまり、「学級通信ノート」の実践を行う事は小学校の学習指導要領にも合致していると言えるだろう。

では具体的な実践方法だが、私の場合は以下の様に行っている。

まずノートを準備しなくてはならない。ノートの規格は自由だが、レイアウトの指導を

徹底するため、必ず学級全員に同じ規格で準備させる必要がある。私の場合、10mmマスを使う事が多いが、平成27年度に担任している2年生では国語12マスノートを使用していた。

ちなみに、コチラの意図を理解してくれない保護者は年々増えており、保護者任せだとノートの規格がバラバラになる事がある。しかも、それは学習面で困難さを抱えた子供…つまり、より指導を徹底する必要のある子供である事が多い。そのため私は、1冊目だけは担任からのプレゼントとしている事が多い。コレに関しては賛否あると思う。

次に実際の展開である。北海道師範塾のサイトにアップしてあるのだが、ご覧になってない方もいると思うので再掲させていただく。

低学年バージョン：

- a. 国語の空き時間に「学級通信ノート」を出させる。
- b. 教師が板書する内容を、そっくりそのまま視聴写させる。
※ 教師は読み上げながら板書していく。
- c. 子供たちが自分で考えて書く部分があれば、それを考えさせる。
- d. 書き終わった子には持ってこさせ、教師がノートチェックする。

高学年バージョン：

- a. 1回目（場合によっては3回目くらいまで）は低学年バージョンと同様に国語の時間に行く。
- b. 以後は、朝自習の時間などに板書しておいた内容を視写させる。
- c. 視写が終わった後、子供たちが自分で考えて書く部分を書くのは低学年バージョンと同じ。
- d. 朝自習の終わり頃に教師がノートチェックする。

低学年と高学年で展開に差があるのは、高学年では時間の確保が大きな問題点となるからだ。

「学級通信ノート」は1回に10～15分かかる。小学校低学年の場合、この時間を確保する事は難しくない。国語の授業時数が多いので、毎日の授業の中で10～15分の活動時間を確保する事が可能だからだ。小学校1年生で平仮名を全部覚えたら指導可能となるので、1年生の2学期以降なら問題無く実践できる。

しかし高学年となると、国語の授業自体が少ないので難しい。そこで私は朝自習の時間を使っている。札幌の大半の小学校では、「朝の会」の時間の前後に10分程度の朝自習の時間があり、そこでの授業内容は担任に任される事が多いからだ。朝自習全てを「学級通信ノート」とする訳にはいかないので毎日は無理だが、週に3回くらいは時間を確保する事ができる。これだけでも、実践すると効果は大きい。

こうやって始めた学級通信ノートだが、子供たちが慣れてきたら徐々に書く分量を増やしていく。

更に、教師が書いた事を写させるだけでなく、自分で考えて書く事にも挑戦させていく。例えば、低学年であれば「きのうは町たんけんをしているとき、雨がふってきたので雨やどりをしました」と書いた後、その時に自分が思った事などを書かせる。あるいは高学年であれば「昨日は調理実習がありました。」とだけ板書し、何をどう作ったか…とか、作った感想…など詳しい内容は、子供たちが自分で考えて書く訳だ。こうする事で、より自分で考えて作文を書く訓練になっていく。

この様な実践をしているので、私の学級では普通の学級通信プリントは原則的に発行し

ていない。ここで「原則的に」と書いたのは、学習予定や事務的な連絡などのために発行する事があるからだ。

また平成27年度に担任している2年生では、月曜と水曜にA5サイズの「おまけ」を発行していた。これは写真などを掲載し、学級で行われた事などを紹介する内容となっていた。もちろん発行日のノート内容と重なっている。これは1年生の頃に保護者から、「ノートだけだと詳しく判らない部分があるので、担任の方から補足する説明をしてもらえないだろうか」

…という要望をもらったからである。

以上で、学級通信ノートの概略は伝わったと思う。最後に、興味をもたれた方のため、1回目の授業の方法について紹介する。ちなみに、これも北海道師範塾のサイトにアップしてある。

1回目の授業は、「黄金の3日間（4月の始業式から3日間）」の間に行う。

指示 学級通信ノートと筆箱を出しなさい。

1回目なので、全員が準備できたのを確認する。

指示 先生が書く通り、1行目に書き写しなさい。

「学級通信ノート」と書き、日付や通し番号も続けて板書する。1回目の授業の場合、テレビで実際のノート映像を確認できるようにする（書画カメラやiPadなどを使う）と間違いが少なくなる。

指示 1行空け、3行目から先生が書く通りに書き写しなさい。

学級通信として保護者や子供たちに伝えたい内容を、読み上げながら板書していく。子供たちの様子を見ながら板書するスピードは調整する。

指示 書き終わったら先生の所へ持ってきます。

持ってきたノートは、その場でチェックする。以下のようなポイントが正確に書けてない子がいると予想されるので、きっちり個別指導する。

- a. 「学級通信ノート」という題名は上から書くのに1マス空けている。
- b. 「学級通信ノート」という題名と本文の間は1行空きが入るのに、直ぐ隣から本文を書いている。
- c. 本文を行の最後のマスまで書かず、適当な所で改行している。
- d. 改行したのに、1マス空けずに文を書き始めている。
- e. 本文の2行目以降、適当に上のマスを空けて（例えば、2マス空けるとか3マス空けるとか…）書いている。
- f. 適当に1行空けて書いている。

ノートのチェックが終われば終了となる。

この通り、学級通信ノートを実践する事は難しくない。興味のある方は、ぜひ実践してみてほしいと思う。